パンのある幸せな食卓を 100

自然観察から始まる狩猟

文 木村安兵衛 text by Yasube Kimura

狩猟というと派手に鉄砲をぶっ放して、猪や鹿、鴨を持ち上げて「獲ったぞう！」みたいなことを想像して狩猟の世界に入る人も珍しくありません。動物愛護の人は「命を殺めるなんて残酷。他にも動物と共存できる方法はある」と言います。私が狩猟を始めたきっかけは地方活性のお手伝いで、実は鉄砲や狩猟には興味はありませんでした。子供の頃は釣りや昆虫を捕まえる、山菜採りなどが好きだったのに、大人になるにつれて、都会の生活に染まって自然から遠ざかっていきました。私にとって狩猟とは失った自然遊びを取り戻すことだったのかもしれません。

さて狩猟の醍醐味の話に戻します。狩猟で大切なことは、その山を知り、動物の習性を熟知することにあります。実際に猟師の先輩達と話していると「今年は暖かいから」「山の椎の実が少ない」「あそこの山は伐採されて切り株ばかりになっている」などのキーワードが多く飛び出してきます。本当によく知っているなあ、と感心してしまいます。

山で遭難者が出たときには、警察は猟師達に相談に来ます。あの辺りだろうという所で発見されることも多いようです。猪や鹿の行動まで分かるのですから当然なのでしょう。なぜそんなに山のことが分かるのでしょう？それは「見切り」と称して狩りの前に下見を入念に行うからなのです。私も何度か見切りの勉強で山に入りました。林道を車で入っていくと動物の足跡や泥の中の水溜まりに多く遭遇します。泥浴びした後、その際の足跡が鋭ければ新しいのです。足跡の上の葉や土の破片の乗り方で、どれくらい前についた足跡か想像できます。その足跡を追っていくと、斜面についた獣道に必ずたどり着きます。斜面についた足跡の削れ方で登っていったのか、降りたのかを読み解くことができます。歩幅からはのんびり歩いたか、慌てていたかなど、足跡の大きさからは体重が推測されます。そしてどちらに行ったのかが分かります。そういったデータを持ち寄って「今日はあそこの山を攻めよう」ということになります。

鹿や猪を寝屋という寝床から追い出したり、撃ち手が待ち構えている所まで追い立てる係（勢子（せこ））は、猟犬との信頼関係を築き、共同作戦、動物との駆け引きを行います。つまり、狩猟の醍醐味というのは自然と一体になることなのでしょう。動物の足跡を辿ったり、食べ物の木を見たりする見切りは、狩猟というよりは自然観察なのであります。

私は動物を殺すことよりもこの見切りから始まる自然遊びにこそ、狩猟の醍醐味があるのではないかと感じております。それは釣り人や海女さんたちが水の中を観察したり、サーファーが天気図を見ながら「今日は南西の風だから良い」とか言ったりするのと同じなのでしょう。

Profile

1969年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業後、千代田生命保険相互会社に入社。その後アメリカで唯一のFDA（米国食品医薬品局）研究機関である米国立製パン研究所へ留学、ベーキングサイエンスを研究する。ニューヨーク、フランスにて修業を積んだ後、その腕前と経営センスを見込まれ、エリック・カイザーの在日パートナーとして、2000年に株式会社ブーランジェリーエリックカイザージャポンを設立。2001年メゾンカイザー1号店として東京・高輪に店舗をオープンし、2021年3月末時点31店舗を数える。